

観劇短評

- (1) 『東海道四谷怪談』(名演例会・前進座公演) 日本特殊陶業市民会館 7/14(水) 13:30~16:30
2016年5月前進座創立80周年記念公演国立劇場大劇場公演
- (2) シネマ歌舞伎『四谷怪談』MOVIX 三好 9/25(土) 10:40~
初演舞台はコクーン歌舞伎&まつもと市民芸術館・2016年6月~7月。コクーン歌舞伎・まつもと市民芸術館での3公演の映像を演出の串田和美が大胆に大幅に編集した[映画版]コクーン歌舞伎・Newシネマ歌舞伎Vol.2.2021として上映されたもの。

7月14日に前進座『東海道四谷怪談』(名演例会・2016年の国立劇場における前進座公演舞台が2020年から全国巡演され、2021年名古屋演劇鑑賞会公演が行われた)を観た。

『東海道四谷怪談』は元禄時代(1688年-1704年)の忠臣蔵討ち入り事件の裏話を語る歌舞伎で、江戸の四谷左門町近辺の事件を題材にしている。塩路(赤穂)藩浪人四谷左門の娘、お岩が塩路浪人の色男民谷伊右衛門と結婚するが、夫に裏切られ、幽霊となって復讐するという怪談である。しかし、怪談という見世物芝居を超えて、伊右衛門の欺瞞と浮気に対するお岩の怨念と復讐が、人間的興味を掻き立て、人々の共感を得て大人気の長期公演となった。夏枯れの芝居小屋を大入りにしようと書かれたが、優れた歌舞伎作家鶴屋南北だけあって、歌舞伎の伝統に従いながら、巷説のお岩と伊右衛門の話新たなドラマにし、お岩の妹お袖の人物像と人間関係を創り、赤穂浪士についても新しい視点を提供している。砂村隠亡堀の戸板返しなど、南北自身が考案した舞台装置や演出は目を見張らせ、他の様々な仕掛けも見事である。悲劇的状况の浪士達や家族達を描きながら、合間に笑わせ、楽しませる鶴屋南北の台本の旨さ、芝居の面白さに感嘆した。舞台、映画、テレビなどで上演上映されるが、長時間にわたる舞台なので、様々に省略される。が、今回の前進座公演『東海道四谷怪談』(4幕8場)は、よく省略される三角屋敷も上演と評判だった。

本作『東海道四谷怪談』は、1825年初演である(作者4代目鶴屋南北は70歳)。鶴屋南北が活躍した文化文政時代(1804-1830)は、様々な商品が店頭並び、消費がすすみ、物質的に豊かな人々が多くなり、多様な町民文化が発展した。一日中かけて楽しむ芝居見物など贅沢を楽しむ町民に反して、不変の禄高による武士の経済生活は逼迫し、武士の品格維持もできず、その倫理が形骸化した。わけても、初演の100年ほど前の元禄時代、『東海道四谷怪談』の塩路浪人(赤穂義士)は、藩断絶(1702年)で俸給もなく江戸に潜み、悲惨な暮らしをしていた。

今回初めて前進座の歌舞伎を観て、題名から想像した怖い幽霊が出没し、スリルを感じさせる超現実的な怪談というより、塩路浪人とその家族達の絡む現実的な暗いドラマに、わけても女の悲劇に感銘をうけた。

物語の中心は塩路浪人四谷左門の二人の娘、お岩と妹お袖である。浅草寺の境内で、非人(乞食)達に虐められている四谷左門を助けた塩路浪人民谷伊右衛門は、お岩との復縁を舅(左門)に迫る。

が、伊右衛門の公金（塩治藩）横領を知った上役として、左門は盗人の伊右衛門との縁を断固として拒絶する。公金横領の露見を恐れ、伊右衛門は清廉な左門の口を塞がねばと、辻斬りにみせかけ袈裟懸けに殺す。

四谷左門の妹娘お袖は、夫の佐藤与茂七が隠密行動で家にいないので、困窮する実家を助けようと昼は浅草寺近くの楊枝店に働き、夜は隠し遊女となる。だがお袖は身を売るわけではない。床に入らぬ内に、哀れな身の上を話し、少しでも金子を貰えたらと頼み、美しい娘なので願いを聞いてもらい、肌を合わせることはない。かねてからお袖に惚れ込んでいる直助は、しかも塩路浪人に仕える中間なので、お家騒動で貧しい暮らしなのは分っている、惚れたお前が共寝してくれれば、いくらでも金をやるからと、お袖の操を守りたい言い訳を聞こうとしない。二人が揉めていると、娼館の主人がお袖を呼び、客が来たからと別の部屋へ案内する。直助がお袖を探すと、客は美男の与茂七でお袖と夫婦だと言うので、直助は怒る。「盗人だ、娼婦の二重売りだ」と騒ぐ直助は、娼館を追い出される。だが、直助は与茂七が義士の一人と気づき、与茂七も塩路藩奥田家の中間直助を認める。お袖に執着する直助は、与茂七を亡き者にせんと、暗い夜中、浅草寺裏田圃まで与茂七の後をつける。しかし一足先に裏田圃に着いた与茂七は、塩路浪人奥田庄三郎（乞食姿）と密かに会い、今度は与茂七が乞食姿の隠密となり、同志に廻文状を届けるため鎌倉へ出立する。闇の中、追ってきた直助は、与茂七の着物に替えた庄三郎を与茂七と思って殺す。しかも、死体が誰か判らぬように残酷にも顔の皮を剥ぐ。直助は、伊右衛門と同様、欲望に憑かれて冷酷無残に殺人し、人を欺く方便を用いる悪党である。一幕の殺人はどちらも、四谷左門のお岩とお袖姉妹に欲望を抱く塩路藩の男の仕業だが、姉妹は悪党に騙され夫婦となって、悲劇への道を進む。

お岩は、父に連れ戻された時、実家が貧しいと知る。塩路藩の上級武士で富裕だった家は、父が貧しても二君に仕えずで、金儲けの仕事にもつかず、ただ主君への忠義を守るだけで困窮している。僅かな金のため父が非人にまで落ちていると知り、お岩はせめて少しでも家計を助けたいと夜鷹に出る。夜中浅草寺から、見失った父を追いかけ、途中で妹お袖に出会う。共に、「まあ、隠し遊女とは」、「辻君とは」となじる。二人は裏田圃で、父と夫の無残な死体を見て驚愕する。姉妹は嘆き悲しみ自害しようとする。まさにその時、姉妹と夫婦になりたい直助と伊右衛門は共謀して止めにはいり、「仇討」が供養と武士（男）の論理を姉妹に説く。そして夫婦になれば、夫として仇討の助太刀をやらせると申し出る。伊右衛門の悪事を知らぬお岩は元の鞘に収まる。下品な直助を嫌いなお袖は悩む。だが仇討ちには男が必要と言われ、助太刀の直助と同居はするが、亡き夫と茂七の仇を討つまでは形だけの夫婦と約束する。ここに好きな男に騙されたお岩と違い、自分の好みや意志と違うのに、仇討ちという武士（男）の正義に従い、嫌な男と同棲に追いこまれるお袖が明らかになる。殺人が発端で、娘たちの探す殺人犯が、それぞれ夫となって仇討ちをしようと言うのは悪どい欺瞞だ。図々しくも敵討ちの誓いをたてる男達の極悪ぶりを、序幕、一幕は見事に暴露している。伊右衛門は、鶴屋南北の新たに造った役どころ「色悪」で、見た目は美しい二枚目の立役だが、冷酷非道な殺人を行い、物欲のため武士の義や誠を捨て数々の悪事を働く。直助も伊右衛門と変わらぬ悪党だが、すぐ心変わりしお岩を殺す伊右衛門と違い、直助は惚れたお袖に死ぬまで尽くすものの、我身を仇討ちできようはず

もない。その上、美男の伊右衛門と逆に、身分下の醜男ではあるし、頓智の効いたずる賢い台詞を語るのに笑いの種にされる。藤川矢之輔がうまくこの道化役を演じている。

この公演では、伊右衛門を嵐芳三郎が、お岩を河原崎國太郎が演じ、それぞれ前進座の美男美女のスターであり、見ごたえがあった。伊右衛門は父を殺してまで夫婦になったのに、産後病みがちのお岩を疎ましく思い始める。隣家の伊藤喜兵衛の孫娘お梅が伊右衛門に恋煩いし、喜兵衛は孫可愛さに策を弄する。血の道の妙薬と偽ってお岩に届けたのは、実は女の容貌を醜く変えてしまう毒薬。伊右衛門に孫娘の婿になってもらいたいためだ。また高師直（塩路の敵=吉良上野介）の家臣喜兵衛は、伊右衛門に高家の士官の道をつけると言う。すると伊右衛門は忠義を捨て、お岩を離縁すると決める。見るかげもなく醜いお岩に、「親の仇など知らぬ。家を出て行け」と邪険に言い、俺の色女にやるのに金が要ると、蚊帳とお岩の小袖を取り上げ出て行く（DVである）。病を看してくれる宅悦から、醜い顔への変貌は伊藤家の毒薬によるし、伊右衛門がお梅と内祝言と聞き、お岩は夫の裏切りに怒る。夫の欲望の犠牲にされ、欺かれては、許せない。その上、毒により痛みが増し、身体も弱ってきて死にかけていると覚る。しかし武士の娘らしく毅然として伊藤家に「礼」に行かねばと長い髪を梳く。だが身体が利かないので、立ち上がりざま、よろめいて崩れ落ち、死ぬ。帰宅した伊右衛門は、宅悦の逃亡とお岩の死を知り、押し入れに隠していた小仏小平を引き出し、殺す。小平は、塩路浪人小塩田又之丞のため秘薬ソウキヘイを盗んだのだと謝るが、伊右衛門は塩路の大義を知りながら、又之丞への小平の忠義にも冷淡で小平を残酷に殺す。今はお岩の死体を片付けるため、お岩の間男に見せかけようと小平とお岩の死体を、残虐にも戸板の裏表に打ち付けて、川に流す。そこで、お岩は幽霊となって伊右衛門、お梅と縁者に復讐する。お岩の怨念に祟られ伊右衛門は初夜の寝床で、お梅をお岩と見間違っして殺し、次に伊藤喜兵衛も殺してしまう。

この伊右衛門の病妻を厭い、若い娘との内祝言を決め、毒を飲ませた妻の死体を残虐な仕打ちで捨てて悪事を見れば、お岩が幽霊となって出るのも当然。幽霊の場面は、火の玉などは照明を変化させ、下座音楽もあってなかなか怪異の雰囲気で見ごたえがある。ただし音楽は舞台幅の狭い市民会館では下手に演奏者が並ばず、音楽は奥の黒幕背後からのせい、明瞭でなかった。見得をきる所は右手に黒子俳優が一人出て来て、「はっし」と音高く拍手を打ち、見事だった。

次の緑したたる砂村隠亡堀の舞台は田園風で美しい。堀に釣りに来た伊右衛門が釣り竿をあげると、流れついた戸板の死骸が釣糸に絡まって現れる。お岩の幽霊に驚いた伊右衛門が慌てて戸板を動かしひっくり返すと裏には小仏小平の幽霊。お岩と小平の幽霊が戸板の表裏で出てくるのは名場面である。自ら死に至らしめた男女の幽霊が交互に出てくる度、伊右衛門が幽霊を怖がるさまは巧みに演出される。隠亡堀の場面は、この戸板返しの仕掛けと相まって、小平とお岩の二役を演ずる河原崎國太郎の早変わりや伊右衛門役嵐芳三郎の戸板のひっくり返しのタイミングが見事で、大いに楽しんだ。怖がる伊右衛門に、つい笑わされた。恐怖が喜劇となる名演技は、前進座の巧な演出によって生まれている。観客は暑さを忘れ、怖がるだけでなく、欲にかられ忠義も捨てた極悪の悪人を憎み、お岩に同情する。この舞台で、一人二役の河原崎國太郎は、戸板がひっくり返される瞬間に、裏で別の衣装に着替える早技と知って感心した。浪宅でのお岩の死と小平殺しの場面も、早変わりが巧かった。台本執

筆後に、南北が戸板返しの演出を考え、絵に描いて、装置・演出を説明し指図したという。生前恋人と思う男に殺され復讐を果たすお岩が、裏切られた女の意地をみせる呪いも祟りも痛快だった。幽霊に崇られる伊右衛門は当然の報いである。父権制下、抑圧されて男の犠牲となって生き、そのあげく死なざるを得なかったお岩が、死んだ後で初めて自分の意志を示し、自分の感情を表に出し、欺いた夫を呪い、崇っている。伊右衛門の悪辣、残酷ぶりには復讐しかない。不幸な生前の「女」(娘、妻)のしがらみを捨て、幽霊となって自身を解放したのだ。伊右衛門が女の怨念に憑つかれ、苦しみ、破滅するのは当然と思えた。

伊右衛門がお岩と小平の幽霊に恐れ慄く砂村隠亡堀の流れのほとりに、鰻かきの直助権兵衛が(中間の次、薬売りを辞め、鰻かきに落ちた)、鰻探しにやって来て、髪絡みついた美しい鬘甲の櫛を拾いあげる。深川三角屋敷に戻ってお袖にやると、お袖は母から姉お岩に譲られた櫛だと気づき驚く。按摩宅悦から、姉お岩の死に際し伊右衛門の姉に対する冷酷な仕打ちを聞いたお袖は怒り、伊右衛門を憎み、姉の死に嘆き悲しむ。泣くお袖に対し、直助は夫与茂七の仇に加え、親と姉お岩の仇を取るからと、そのためには本当の夫婦となってくれと迫り、とうとうお袖は身を任せる。遊女となっても守った操を仇討ちのため、捨てるのである。

ところが、深川三角屋敷で二人が初めて枕を交わしている最中に、佐藤与茂七が直助を訪ねて来る。隠亡堀の暗闇の中、伊右衛門、直助権兵衛、与茂七とおもんが黙ったまま、ゆっくりと廻った場面(「だんまり」)で、与茂七は直助権兵衛に義士の廻文状を奪われ、自分は鰻搔きを手にした。そこで鰻搔きをもって、廻文状を取り返しにやって来たのだ。与茂七は直助の家にお袖を見て、お袖が直助と夫婦になったと知る。与茂七は妻を奪った直助を殺そうと思うし、直助はお袖を奪われたくない、与茂七を殺さねばと思う。二人とも相手を殺す覚悟と知ったお袖は、自分が身代わりに死ぬべきと、二人に別々に殺しの手引きをする。灯を消したお袖の合図で、男達は屏風の内に切り込む。屏風を開けると、月の光に書き置き(遺言)をもち、斬られて苦しむお袖。お袖は夫の敵討ちのためであれ「女の操を破った」自分を罰して、二人がお袖を討つように手引きしたのだ。死ぬ間際に、生きては愛する与茂七と一緒になれないが、「せめて、あの世では夫婦に」と与茂七に頼む。直助には約束通り、父四谷左門と姉の仇を討ってほしい。しかし「実は、元宮三太夫の娘」という出生時の書付があるので、仇討ちの後、実の兄に伝えてほしいと頼んで死ぬ。

直助は、死に際の懺悔として、自分は武士元宮三太夫の長男で、お袖の兄になると与茂七に告白する。自分は、血をわけた妹を抱き、近親相姦を犯した。また主君の長男奥田庄三郎と与茂七と見誤って殺したが、それは主君殺し。二つの大罪を犯したので、死ぬしかないと、与茂七に廻文状を返し、自らは出刃で腹を切って死ぬ。

この深川の三角屋敷の場は、お袖の悲劇を明らかにする。この場面を入れた前進座舞台は、南北の原作を翻案した小野文隆(台本)によってお袖の人物像が生き生きと描かれ感動的な芝居となっている。何よりけなげなお袖の心と魅力的な人柄が上手く舞台化されている。美人で男に人気あり、気ままに生きていけると見えるお袖だが、夫が隠密で家になくても、たとえ遊女になっても夫への貞節を守る。仇討ちのためだと説かれやむなく直助と同居したが、父と姉の仇を知った今夜まで、名ばかり

の夫婦だったのだ。その時、死んだと思った夫が出現し、不倫した罪を贖うために死を選ぶ。これらすべては、父権的武家社会において討入のために生きる塩路浪人達の論理に従って「女の道」を生きたお袖が男達の犠牲になったことを明らかにする。この三角屋敷の場を観ると、姉お岩と同じ塩路浪人の娘で塩路浪人の妻ながら、お袖は塩路浪人の娘・妻ゆえの女の美德を守ろうとして、より悲劇的である。生きている間のお岩は美しく優しい娘で貞淑な妻だが、夫に欺かれたお岩は幽霊となり、人々に祟り復讐することで雪辱を果たす。一番の悪党伊右衛門を死の淵まで苦しめ、死んだも同じと思わせるほど、幽霊の力を発揮する。だが始めから自分の好み、意志、感情を明瞭に表現して、魅力的な女として生きてきたお袖は、昔ながらの操第一の女の美德に縛られて、死ななくてはならない。直助は自らが殺した「夫」の仇討ちとお袖を騙し、与茂七も遊女と遊ぶ暇があっても自宅へ帰らぬ不実がある。さらに与茂七はお袖が廻文状を見たを知って、隠密として妻を殺さねばと思う。一途に与茂七を愛して不幸になるお袖と、与茂七は誠実さが違う。これらの直助の不実と与茂七の不実を知らぬまま、二人の男に操をたててお袖は死ぬ。死ぬ前に伊右衛門の不実を知り、復讐するお岩と違い、お袖は不実な与茂七をあの手で待つと言い、哀れである。

舞台は、古典をそのまま演じるのではなく原作の再検討をして、人物中心に演じようという前進座の趣旨に添い、台本の小野文隆がお岩、お袖の人物像を掘り下げ見事に仕上げている。古典を批評的に研究し、南北作品の復活上演を続けてきた前進座ゆえに、新しい演劇的創造を目指して上演したと演出進行の中橋耕史も言う。とりわけ、お岩とお袖の人物像から、『東海道四谷怪談』の現代にも通じる「女の問題」が浮かび上がり、今に生きる歌舞伎となっていて興味深かった。

ただ一人生き残った佐藤与茂七は、小仏小平の妻お花（河原崎國太郎）と共に、伊右衛門を探しに行く。蛇山庵室に実の母お熊（このドラマで唯一なかなかの悪女。高師直の元女中）と一緒に隠れ住む伊右衛門を見つける。が、伊右衛門とその母はお岩の幽霊に祟られ、さらに庵に群れている鼠もお岩の怨念から二人を苦しませる。生きているのも嫌だ、あの世がましかと思う伊右衛門である。雪の中与茂七は、伊右衛門の仇討ちに成功する（この雪は、四十七士の討ち入りの時の雪となった）。

悪党が最後に罰されて終わり、長くても見ごたえのある良い芝居だった。

9月25日に NEW シネマ歌舞伎『四谷怪談』（2016年コクーン歌舞伎公演の映像化）を観た。

前進座公演の2ヶ月後過ぎに、「シネマ歌舞伎」を観たわけだが、串田和美演出のコクーン歌舞伎とあって、歌舞伎の名優が演ずる串田和美の斬新な演出を期待して出かけたが、映像と実際の舞台との違いもあるが、前進座の舞台の後では感動がなかった。串田和美は3つの公演映像をバラバラに編集し直して、どの公演とも違う独自の編集で映像として面白いものにしようとしたと語る。ただ、そうした凝った編集・演出による映像の裏の意味をとる間もなく、ドラマが進んでいった。串田和美との対談で木ノ下裕一が言うように、理解するには何度も観る必要があると思った。次の場面が重なって映り、また文化文政と現代という二種の映像が入り混じる、ということもあり、時間も短縮され2時間の凝縮された映像（前進座は3時間の舞台）では理解が難しかった。

シネマ歌舞伎『四谷怪談』は、塩路浪人の群像劇だと串田和美は言う。そこで、どの浪人も（舞台

で塩路浪人を演じた俳優達も現代のサラリーマン姿で映る) 一様に生気を失った幽霊のように一群となって東京駅を背広姿で通過する。現代の男達が、文化文政時代の塩路浪人の芝居の映像の間に挟まり、ただやみくもに働くサラリーマンと塩路浪人が交差する。不安そうな眼付の伊右衛門は、欲望にかられ、塩路浪人の忠義を捨て、幽霊のように迷っている。塩路の仇、高師直に士官するのでは、伊右衛門は自分そのものがないのではないか。たしかに塩路浪人は討ち入りのため江戸に潜んでいて、経験したことのない貧乏や、身分を落とす経験に追いやられ、行き場(仕事)のないゆえの閉塞感に悩んでいる。串田和美は、伊右衛門だけでなく、『四谷怪談』のすべての人間が、本能と欲にかられ行動しているという。塩路浪人が東京駅のサラリーマンの群像だという考えと相通じるものである。しかし、前進座の善悪明白な舞台の後では、いくら群像劇とは言え、伊右衛門と他の塩路浪人達とが同じ悩みで苦しんでいると言われると、納得できないところがある。

お岩の幽霊は、中村扇雀の長い髪を梳く場面が印象的であった。木ノ下裕一が対談で、髪梳きのこの場面に、お岩と伊右衛門の会話が聞こえてくるというような高度な編集の画面だったと語るが、お岩の髪梳きの凄みのある美しさにただ感嘆した。まだ幽霊でないのに鬼気迫るものがあった。お岩は舞台の間、大部分幽霊を演じ、その前でも産後の病で病みつかれていて、美貌が衰えているのだが、さすが扇雀は美しい。この舞台では、扇雀がお岩と佐藤与茂七との二役で、与茂七は中村獅童演じる民谷伊右衛門より、いなせな美男に見えた。そして七之助のお袖も可憐で美しかった。また勘九郎の直助は、前進座の直助より、当然若いし、悪党でも愛嬌があって良かった。

前進座公演で楽しんだ戸板返しや、お岩のドロドロという音響で怖い幽霊の出現や、「だんまり」の場面、三角屋敷のお袖の死などの仕掛けが、映像では見られなかった。コクーン歌舞伎では、南北の考案した仕掛けや装置による伝統的歌舞伎の演出は使われず、全く新しい串田和美の演出で表現され、斬新で驚きに満ちていた。隠亡堀の戸板返しも、大勢の人々が肩車して両手で支え合い、お岩の死体を川から担ぎ上げ、魚釣りする伊右衛門を脅かし怖がらせるというものだったが、早いカットによる映像で見逃した演出もあった。

この「シネマ歌舞伎」上映とほぼ同時期に、2021年『九月大歌舞伎』で、お岩玉三郎と伊右衛門を仁左衛門の歌舞伎座公演があり、おそらく伝統的演出だったと思われる。コロナ禍で観に行けず残念であった。将来、「シネマ歌舞伎」の映像で観ることができれば、幸いである。

最後の場面、地獄に落ちる寸前に真赤に燃える炎の煉獄の中で、中村獅童演じる伊右衛門が一人、立ち尽くし、「これは夢か。この世の果てか」と語るのは、夢も希望もない感じで、印象的であった。

原書文献：

『東海道四谷怪談』(新潮日本古典集成 第45回) 郡司正勝 校注。新潮社 昭和56年(1971)発行

(玉崎紀子 記)